多賀町教育委員会 編 『敏満寺は中世都市か?』

新谷 和之 · 高津 浩司

1 本書の構成と要点

敏満寺(滋賀県多賀町)は、現在多賀サービスエリアがある台地上に存在した中世寺院で、台地の西側には敏満寺城、寺域の南端には石仏谷中世墓地が位置する。当寺は、鎌倉期、東大寺を再興した重源との関わりを持ち、室町期には多くの堂塔を有し栄えたが、戦国期、浅井長政、次いで織田信長の焼き討ちによって終焉を迎えたと伝えられている。

本書は、平成17年7月に石仏谷墓地が国史跡に指定された流れを受けて、同年11月に開催されたシンポジウムの内容を基に、その後の成果も加えてまとめられた記録集である。

はじめに本書の構成を示しておく。

敏満寺へようこそ 仁木宏
講演
石仏谷中世墓地の発掘調査結果からみた敏満寺の風景
宗教都市を守るもの 中井均
戦国近江のなかの敏満寺 -中世都市の空間と景観-
古代・中世の敏満寺と石仏谷中世墓地 細川涼一
考古学から見る石仏谷墓跡 松澤修
討論
敏満寺は中世都市か?
研究と調査
石仏谷墓跡と戦国期の敏満寺 勝田至
中世後期の近江における寺院と
火葬場 - 文献史料による事例の紹介 高田陽介
山寺における直線道路の存在 ―近江国南部の事例を中心に―

以下,本書の主要な論点である,「石仏谷墓地の評価」 と「敏満寺は中世都市か」の2点について各論者の主張 をまとめる形で,本書の内容を紹介したい。

交通の十字路敏満寺 ………… 松澤修

敏満寺は中世都市か -まとめに代えて- ·····・ 仁木宏

石仏谷墓地の評価

石仏谷墓地の発掘調査では、12~16世紀の土器・陶磁器(蔵骨器として利用)が確認されたが、遺物のピークは13世紀後半から14世紀までで、15世紀以降は急激に減少することが判明した。一方、墓地に残る石仏の多くは

15世紀後半以降のものであった。

この墓地の被葬者については、中世を通して敏満寺の僧であるとする松澤氏と、中世後期には寺僧以外の人々も含まれるとする他の論者とに評価が分かれた。

松澤氏は、寺の道や堂院と同時期につくられた巨大な 区画があること、山の斜面を削ってつくった平坦部に石 仏を置き、その下の斜面に蔵骨器を埋めるという特殊な 埋葬施設があることから、僧侶とその関係者の墓地であ るとした。また、古い蔵骨器と新しい石仏を一緒に使っ た事例から、中世後期も一貫して蔵骨器を伴う墓が寺僧 の墓地としてつくられたとした。

動柄氏は、15世紀、敏満寺の中心が北側に移ったことで、それまで葬られていた僧侶らの墓は別の場所に移動し、石仏谷墓地は村の人々主体の墓地になったとした。

細川氏は、石仏谷墓地は敏満寺と西福院(後堀河天皇の中宮、藻壁門院の御願寺)の奥院として、鎌倉期には 藻壁門院の供養塔や墓所が造営され、中世後期には敏満寺一般民衆の墓地になったと推測した。

勝田氏は、夫婦の墓と思われる二尊並座の石仏があることから、中世後期の石仏谷が寺僧以外に被葬者を広げていったと論じ、また、近辺の国人が敏満寺の院家を祈願所としているので、この信仰圏と被葬者の出身範囲が重なっていた可能性を指摘した。

高田氏は、小さい石仏や一石五輪塔の存在から、中世後期には幅広い階層の人々が葬られたとし、さらに、中世後期の遺物が少ない理由を、葬送のスタイルの変化に求めた。すなわち、火葬場で焼いた骨を共同納骨施設(墓地でみつかった大甕)に投入し、後日、石仏谷に供養のための石仏を置くようになったとしたのである。

敏満寺は中世都市か

まず、台地上の空間をどう評価するかが議論された。 松澤氏は、埋甕遺構を根拠に、台地の北部に町屋があったとする従来の評価に対し、甕は藍や油ではなく水を溜めるものであり、台地上は寺坊しかなかったとする。中井氏も台地上は僧侶だけの空間であると述べた。これに対し仁木氏は、寺坊が立ち並ぶ南部に比べ、台地の北部にはさまざまな生業の痕跡があること、北部以北にも居住区の可能性があることを指摘した。

次に、敏満寺村、多賀大社とその門前町も含めて一つの領域と捉えるべきであるとの指摘がなされた。台地西崖下の敏満寺村は、敏満寺や多賀大社と深いつながりのある新谷氏や、近江猿楽「みまじ座」の存在から、敏満寺の空間構造の中で考えるべきだと仁木氏は述べた。また、中世後期、多賀大社と敏満寺は密接な関係にあったこと、その門前町は敏満寺と地理的に近く、敏満寺と共通の門前町とも捉えられることから、仁木・鋤柄両氏は、多賀大社とその門前町との空間的な一体性を重視した。

最後に、「敏満寺は中世都市か」という問いに対する各論者の見解をまとめる。敏満寺を「都市」と明確に認定したのは、鋤柄・松澤・仁木三氏である。鋤柄氏は、中世前期の敏満寺は、奈良時代以来の論理に基づく「宗教都市」で、中世後期には多賀大社との関係を重視した「寺院城塞都市」になるとした。松澤氏は、台地上には商業施設はないが、人間や物資が集積する点、僧侶の多様な属性(金融活動など)から敏満寺を「都市」と認定した。

仁木氏は、中世の近江では、農村や寺院に居住する商人が各地の市町に出向いて商業取引を行うのが一般的であり、同時期の大阪平野に見られるような大きな都市はほとんどみられないとする。その上で、「政治・経済・宗教・文化など、総合的な意味で地域の中心地としての機能を発揮している場を都市と認定する、中世固有の新しい基準を確立するべき」(本書p.170)とし、地域の中心地である敏満寺を「都市」と認定した。

2 本書の意義・疑問点

まず、都市論の観点から本書の意義を二点にまとめたい。一つは、都市空間を軸にして、敏満寺の研究を前進させたことである。

前回の「敏満寺座談会」(平成14年)では、敏満寺城や石仏谷墓地の基本的な性格が明らかになったものの¹⁾、それぞれの報告がどのように関連し、総体としていかなる空間像が描けるのかは不明なままであった。

本書では、「敏満寺は中世都市か?」をテーマにしたことで、敏満寺城や石仏谷墓地の都市空間の中での位置づけ、特に、石仏谷墓地と都市空間との関係が明確になった。15世紀末以降の墓地の被葬者を僧侶とするか、民衆も含まれるとするかは評価が分かれたが、その評価の違いは都市空間の評価に反映された。石仏谷墓地と敏満寺の都市空間とを一体として捉えるべきであるとの認識は共有されたのである²⁾。

さらに、敏満寺村、多賀大社とその門前町も含めた広い領域として敏満寺を捉えるべきであるという指摘は重要である。従来、中世の敏満寺村は「水田的景観」とされ³⁾、多賀大社との空間的な関係は考慮されなかったため、台地上の部分しか検討されなかった。地域の中心地であったこれらの場と敏満寺とを一体として捉えることで、地域社会における敏満寺の役割の大きさが明確になったといえる。

もう一つは、中世都市の新たな定義を提唱したことである。それは、総合的な意味で地域の中心地としての機能を発揮する場を「都市」とすべきだという仁木氏の提言である。

敏満寺は、その場で明確な商取引が行われた形跡はないが、政治・経済・文化・宗教的な面で地域社会の中心

であった。このように多様な機能を内包する空間は、単なる宗教施設ではなく、「都市」と表現するにふさわしい。だが、商業取引の有無を都市の指標とする限り、「都市」とは認定されない。仁木氏は、中世寺院を「都市」として評価するため、「中世都市」の概念を広げることを提案したのである。

かつて網野善彦氏は、中世都市の本質を「無縁」「公界」「楽」というキーワードで説明し、それらが確認される場を都市と認定した $^{4)}$ 。だが、網野氏が掲げた指標は観念的であるがゆえに、その実証性などをめぐって様々な問題点が指摘されている $^{5)}$ 。

また、前川要氏は、中世寺院にみられる計画的な都市プランが近世城下町に影響を与えたとし、中世寺院の都市性を評価した⁶⁾。だが、本書所収の藤岡論文は、近江南部の山岳寺院にみえる計画的なプランが必ずしも都市的様相に結び付かないとした。形態だけで都市かどうかを判断できないのは明らかである。

仁木氏の提言は、観念論や形態論に終始することなく、 実態面から都市の指標を導き出した点で高く評価でき る。

次に、本書全体を通して疑問に感じた点を述べたい。 討論では、敏満寺を「都市」とする仁木・鋤柄・松澤 三氏の間で、敏満寺の都市構造についてのイメージと、 都市の定義が異なっていることが浮き彫りになった。鋤 柄氏は、中世前期と後期で実態の異なる空間をいずれも 「都市」の範疇で捉えたが、その場合、「都市」とはどう 定義されるのか示されなかった。松澤説については、僧 侶だけが住む空間を「都市」とすると、「都市」の概念 を無限定に広げてしまう危険性がある。

「敏満寺は都市である」という点で三氏は同意するが、 実際にそれぞれがイメージするところは大きく異なる、 という混乱した状況が生じているのである。「都市か否 かという二元論的なお話になってしまっている」(本書 p.82)という藤岡氏の批判は、まさにこうした混乱状況 に対して向けられたのであろう。「都市かどうか」を論 じる前に、「何をもって都市とするか」について各論者 の見解を整理する必要があったと考える。「都市とは何 か」を本書で明確に定義したのは、仁木氏だけであった。

また、仁木氏が示した都市の指標に関しては、「中心性」をどう実証していくかが重要である。政治的・経済的性格などを読み取ることはできても、「中心である」ことを示すのは、史料の乏しい中世史では非常に困難であろう。とはいえ、この点をきちんと詰めなければ、せっかくの提言がいかされず、曖昧な議論になりかねない。そこで、中世寺院の分布状況や、敏満寺と関係をもつ国人・土豪の分布状況など、中心性を示すいくつかの指標を組み合わせて実証性を高めることが有効であろう。事例を重ねて方法論を磨きあげていくことが期待される。

以上,不十分ながら本書の紹介を行った。本書の問題 提起を受け,各地の中世寺院研究が進展し,中世都市研 究が活性化されることを願ってやまない。

注

- 1. その成果は、多賀町教育委員会編『敏満寺の謎を解く』(サンライズ出版、2003年) にまとめられている。
- 2. 一の谷中世墓地(静岡県磐田市)でも同様の分析がなされている。この墓地は、中世前期には、当地の支配者層である在庁官人や北条氏の従者を埋葬した墳丘墓や土壙墓が中心であったが、中世後期、都市の発展に伴って町人を被葬者とする集積墓が増えた(網野善彦・石井進編『中世の都市と墳墓 一の谷遺跡をめぐって』日本エディタースクール、1988年)。
- 3. 前川要「中世近江における寺院集落の諸様相」『日本考古学』 19号, 2005年。
- 4. 網野善彦『増補 無縁・公界・楽』(平凡社, 1987年), 同『日本中世都市の世界』(筑摩書房, 1996年)。
- 5. 網野都市論の研究史上の位置付けや問題点については、仁木 宏『空間・公・共同体』(青木書店,1997年)を参照していた だきたい。
- 6. 前揭注3前川論文。

(サンライズ出版, 2006年, 172頁)